

んなに話すことだけです。

私は、この六十年の間に人間として、「悲、歎、離、合、喜、怒、憂、思、哀、恐、驚、酸、甘、苦、辛、感」のすべてを体験した。運命に翻弄された大半生と
いっても過言ではないだろう。

ただ、中国にいる間に、大変に親切にもらった人々に対して、何の恩返しもできなかったことだけが心残りである。

中国残留日本人問題が解決しない限り、あの日中戦争は、まだまだ終わっていないのである。

赤峰から引き揚げてきて

福島県 渡辺 モト

一 夫と共に

私は大正十二（一九二三）年三月九日、福島で高橋友吉の四女として生まれた。幼時はお人形さんのようにかわいいと言われ、家を買う物に来るおじさんに肖

像画を描いてもらったほどであった。昭和十四（一九三九）年に福島女子師範学校一部に入学し、十八年に本科を卒業、さらに十九年専攻科を卒業した後、隣村の玉井村小学校に訓導として赴任した。女子師範学校の校長先生が卒業式の訓話で、「今は戦争のために日本国内には男子が少ないので、あなた方は朝鮮にいる人であろうと満州にいる人であろうと日本男子のお嫁になってほしい」と言われたのをよく覚えていた。私は素直な気持ちで、国外に出ても日本男子のお嫁に行くのが当たり前のように思うようになった。

ある日、玉井村馬場の渡辺喜市氏から、満州で働いている次男、渡辺夫さんの嫁に是非、と申し出があった。喜市氏は学務委員で、常に校長室に入入りしていたし、校庭を借りて馬術の訓練などもしていたから、私の人柄も何もかも分かった上での申し入れだと思っただけ、私には、まだ一度も会ったことがない人との縁談に戸惑う気持ちがないわけではなかった。しかし、父の友人からも、渡辺喜市氏からは非息子の嫁にもraithたいと強い希望があったことを伝えられ、この縁談

は断りきれないと思った。

当時、玉井小学校には助教師が六、七人いたが、師範出は私一人であった。私の担任は五年生の女子組であったが、音楽の授業は各学年とも担当していたし、ほかに青年学級の授業も受け持つなど、責任は広い範囲にわたっていた。それだけに、張り合いのある楽しい毎日であった。しかし、世の中は戦時色が濃くなるばかりで、ついにはB29による日本各地への空襲が始まった。福島でも本宮町のグンゼ工場、郡山保土ヶ谷工場が爆撃されるようになり、内地より満州の方が安全だと言われるようになって、私はこの縁談をお受けすることにした。渡辺夫という簡潔で男らしい名前も気に入っていた。そのころ主人の親友で、白河の東村の田崎武氏がやはりお嫁をもらいに帰っていたが、一足先に結婚し渡満されたのも、私達の結婚を早めるきっかけになったようだ。私は担任の五年生の学事終了を待たずに結婚式を挙げた。

戦争の影響で、品物を買うのにも点数の枠があり、嫁入り道具などを揃えるのに両家の親達はあらゆる手

を尽くしてくれた。主人の父親は、会津塗りの品々を買うためにわざわざ会津若松市まで出掛けてくれた。私の両親も、点数の足りない衣料品などは米を処分して買ってくれた。そしてその品物の荷造りから発送まで一切をやってくれた。

私達の出発の日には親戚一同も集まり、お寿司やおにぎりなど弁当を持たせて見送ってくれた。本宮駅まで見送ってくれた父の姿は今でも脳裏から離れない。

当時門司に行くのに、表日本を通る東北・東海道線などは空襲があつて危険なので、新潟經由の北陸・山陰線で下関に行き、門司から船で朝鮮半島に渡った。

対馬海峡では船酔いがひどく、甲板に出て蒼い波のうねりを見て過ごした。無事釜山に上陸したが、私は体調が悪かったので釜山で二泊して、いよいよ大陸に続く広軌鉄道で朝鮮半島を北へ向かった。安東、奉天（瀋陽）、錦州を経て熱河の赤峰に至る長い旅であったが、主人は話題の豊富な人で退屈する事はなかった。列車は多くの満人で混み合っていて息苦しいほどであったが、外を見ると、ラタダに乗った女性が前後

に男の行列を従えのんびりと進んで行くのが見えた。しかし一握りの緑もない果てしない赤土の荒野は、やがて砂漠につながる地の果てのようであった。熱河、赤峰という地名は、その風景をよく表している。日本とは全く違う荒涼とした有様を見て、大変なところに来てしまった、とため息が出たものであった。

二 夫の渡満と結婚までのこと

主人が昭和十三年に安達中学校を卒業したころは、国策で五族協和・滿蒙開拓が叫ばれていた時で、満州へ渡る事が誇らしく思える時代であった。主人も、満州で働く事に男の情熱を燃やしていたので、亡くなった叔父の知人、米沢時義氏を頼って渡満することになった。主人は、初めての土地へのひとり旅だったので、乗る列車を探すのにも苦労したということであった。汽車の長旅だったので、顔はばい煙で真っ黒になるし、体調も悪くなって下痢する始末。ようやく奉天に着いて、「渡辺夫出迎え」と書いた旗を揚げて出迎えてくれた米沢さんにお会いしたときは、地獄に仏とはこのことだと思った、と主人はいつも感謝の気持ち

で話していた。主人は赤峰自動車営業部に勤務することになった。

その後、現役 of 兵隊検査で朝鮮羅南第八五部隊伊藤隊に入隊し、憲兵隊に配属された。

その頃、同郷の玉応丈夫氏が奥さんを迎えに東安省青山キョウシから羅津ラジュンに来ていた。船が到着日より遅れているというので、主人は憲兵という職掌柄どこでも自由に入れるので、二人が一刻も早く会えるようにと、写真を預かって奥さんを捜す手伝いをした。結局、奥さんの乗った船は、浮遊している機雷を避けて航海したので到着が七日も遅れたということであった。さんざん心配したが二人は無事出見え、青山に帰っていった。今でも、村で出会うとこの時の話が出る。

主人が兵役を無事に勤めて除隊し、赤峰の元の職場に戻った。主人の親友、田崎武氏も除隊して同じ自動車営業部に就職した。

昭和二十年、田崎さんが千賀子さんと結婚、この結婚がきっかけとなって、一足遅れで私も主人と結婚することになり、主人共々満州の赤峰に渡り、ちょうど

空いていた一戸建ての社宅で新婚生活を営むことになった。

三 赤峰の新生活

赤峰の社宅は広い庭と畑があつて、放し飼いの鶏が十羽くらいいた。隣近所も満鉄に勤める方々で、お互いによく行き来をしたものだった。また、夕方には外出した兵隊さんが立ち寄つて内地に残してきた家族の話をしたり、ご主人が出征し、幼児を抱えて留守を守る奥さんに身の上相談をされ、故郷の新潟に帰るよう勧めたこともあつた。充実した日々が続いていた。

しかし、私達の充実した楽しい新婚生活は長くは続かなかつた。戦局がだんだん悪くなつていくことは噂に聞いていたが、昭和二十年八月、主人が真っ青になつて社宅に帰つてきて、ソ連軍が大挙して満州に侵攻してきたので、女、子供は身の回りのものだけを持つて自動車で錦州に引き揚げるよう命令が出たという。

私は自分の髪の毛を切つて赤峰に残る主人に預け、主人の髪の毛を懐にしまつて泣く泣く錦州に向かっ

た。空には敵味方も分からない飛行機が二機、輪をえがいて飛んでいた。不安のまま錦州に着いて、私は田崎千賀子さんと一緒に主人の知人、住田三郎さんのお宅に同居させてもらった。

数日遅れて、主人達の自動車部隊も錦州に到着した。主人達は敵の進撃を妨害するために橋を爆破したり、焼き払つたりしながら錦州に来たといふことであつた。家財道具などは一切社宅に放置してきたが、無事生きて出会うことができたのは幸せなことであつて、これから先のことを考えるゆとりなどはなかつた。

八月十五日、大事な放送があるから聞くようにと伝えられた。それは敗戦を伝える天皇陛下の玉音放送であつた。涙はとめどもなく流れ、この後、どうなるのか、どうしたらいいのか分からなかつた。錦州の広場は放送を聞きに来た日本人でいっぱいであつた。そんな時に命令が出て、日本人は奉天に集合することになった。お世話になつた住田さんに別れを告げ、主人と一緒に奉天に急いだ。奉天に着いた私達は、満鉄社

宅芙蓉寮の二階の一部屋に、二家族同居で住むことになった。芙蓉寮は城のような建物で、私達のほかにも大勢が住むことになった。警戒のため出入口を一口所に限定して住民が交代で門番をすることになった。

奉天の情勢は急激に悪化し、満州人が日本人を馬鹿にして、「日本ビョ」と叫びののしかったり、日本軍の補給基地の倉庫に保管されていた、文房具、食料品、衣料、その他生活用品などの物資を、満州人の老若男女や子供までが、アリの餌を運ぶように行列を作って持ち出して行くのを、家の中からおそるおそる見ていた。また、立派な日本の軍馬が道路上を彷徨していたが、それをつかまえることもできなかった。

ついに、物を盗るだけでは済まされず、あその奥さん、こちらの娘さんが連れていかれたという悲しい話がひそかに伝わってきた。日本人の住宅が壊されて床板や天井板が残らず持ち去られたという話もあった。敗戦の惨めさ、哀れさに、私達は生きた心地もなかった。敗戦の民族の悲惨さをいやというほど味わい、恐怖の中で「命だけは」と神頼みの日々だった。

私達がいた芙蓉寮は入り口を門番が守っていたが、ソ連兵が来て私達に立ち退きを命じた。一回目は腕時計や万年筆を渡して、立ち退きをせよと済んだ。

二回目の立ち退き命令が来たときにはどうしようもなく、数人の女性に犠牲になってもらった。三回目には打つ手もなく、今すぐ立ち退くように命じられた。主人は仕事に行って留守だし、私は妊娠八カ月でどうしようもなかったが、取りあえず出産に必要な物を持って日本人の社宅に身を寄せた。しばらくして、芙蓉寮に戻ってもよくなった、との連絡があった。ソ連兵のやり方に腹が立ったが、何をされるか分からずびくびくはらはらしていた。兵隊の怒声に追いついて立てられて無我夢中で一日が暮れようとしたとき、やっと主人が帰ってきた。不安でいっぱいだった私は、主人に抱きついて泣き崩れた。

多くの避難民が収容されたのは学校や倉庫で、冬は零下四十度まで下がる厳しい寒さなのに、板やコンクリートの床にそのまま寝起きする有様であった。また生活を支えるために、年配の日本女性がわずかな肉を

切り売りするような惨めな生活を強いられていた。食べ物も衣類も乏しく、人々は飢えに苦しみ、その上、伝染病がはやって多くの死体が広場に山と積まれる地獄さながらの惨状を聞いたが、私達にはどうすることもできなかった。このような痛ましい話は、引揚げ後も開拓者はじめいろんな人達から、何十年過ぎた今日この頃でも聞かされる。このような事実を日本人は尊い戒めとして記録しておかなければならないと思う。

四 帰郷

嚴寒の冬をなんとか生き抜いて、昭和二十一年の春が来て、やっと日差しが暖かくなり街路樹の柳が芽吹き始めたころ、引揚げ婦国の話があり手続きも始まったが、私は出産の日が近く引揚げどころではなかった。四月二十日、最初の陣痛が始まった。朝四時頃、産婆さんに来てもらったが、様子を見て「まだ早い」と帰ってしまった。夜になって陣痛が近くなり、主人が提灯を持って産婆さんを迎えに行った。少し前、明かりを点けずに歩いていた人が否応なしに射殺される事件があったほど治安が悪くなっていたが、無事産婆

さんを連れて帰ってきた。私はもう無我夢中であった。主人をはじめ、同居の奥さんもお湯を沸かすやら何かと手伝ってくれた。おかげで産声も大きく、元気な長男が生まれた。安産であった。「敏」と命名した。産後一週間ほどで乳腺炎の症状があり、吸い出してもらったが乳が出なかった。熱が出て、どじょうで熱冷ましをしたが、効き目なく、結局は切開することになった。麻酔も打たないでそのままの手術である。お産よりもひどい痛みであった。赤ちゃんをひとりぼっちで部屋に寝かせて私は病院通いをした。病院に行く途中に日本の女学校があつて「故郷」という懐かしい歌が流れていて、しばらく足を止めて聞き入っていたことがあつた。

六月になって引揚げの命令が出た。名古屋帯をほだいて赤ちゃんを抱える袋を縫ったり、主人の袴をほぐして私のズボンを作り、縫い目に日本紙幣を縫い込んだり、旅の準備で忙しかった。引揚げが始まり、私は手作りのリュックサックを背負い、両手には持てるだけの荷物を持った。乗ったのは無蓋車であったが、こ

の列車に乗り込もうとする人達が次から次へと乗ってきて足を伸ばす余地もないほどの混雑であった。夜中に汽車が途中で停車して五、六人の日本人が乗り込んできたが、その人達の話を知ると、一緒にいた女性がお産をしたばかりで動くに動けず、どうしようもなく残してきたという。私は背筋が寒くなった。戦争に敗れて満州から避難する人々はいつも命の危険にさらされていた。私達もいつどうなるか分からない。

途中で赤ちゃんに水を飲ませたいのに飲み水がなくて困ったが、主人が水の工面に走り回って探してくれて、赤ちゃんに飲ませた時は本当に嬉しかった。汽車はやっと盧溝橋ロコウキョウに着いた。

七月二日、日本から来た迎えの船に乗って舞鶴港に着いた。箱庭のようにきれいな山や川、緑の多い景色を見て、なんと綺麗なんだろうと祖国日本の美しさと、平和のありがたさに涙があふれた。私はその美しい景色に手を合わせ「やっと帰ってきましたよ、やっと帰ってきましたよ」と祖国のありがたさに感謝した。上陸してから、自転車に乗って走っている女性の

姿を見て珍しく思った。

上陸してすぐ、シラミの駆除など消毒の連続であった。そんな中、祖国に帰り着いたという安堵から気のゆるみもあったのであろうか、頑丈だった主人が腹痛を起こして歩けない状態になった。私は子供を抱いていてどうしようもなく、三人で立ちすくむしかなかった。

七月十日の朝、やっと本宮町の駅にたどり着いた。駅には通勤通学の人達が大勢いて、引揚者親子の哀れな姿をジロジロ見ていた。私の家族が、おにぎりやおかずなど食べ物を持って待合室に出迎えてくれた。私が満州へ行く前に勤めていた小学校の教師仲間など、知り合いも涙ぐみながら迎えてくれた。とりあえず主人の家に行った。家族も、親戚の人達も、私たちの元気な姿を目の前にしてやっと生きて帰ったと安心したようで、黒く日焼けしている私たち夫婦と赤子の敏を見つめながら涙ぐんでいた。

その後、私と子供は実家に帰った。ようやく家に帰ってきた。夢ではない。本当に我が家に帰ってきた

のだ。何度も何度もそう思って安心して眠った。私はしばらく実家で休養していたが、主人が迎えに来て主人の家の隠居所で生活することになった。それからの生活は大変だった。家族は十六人である。慣れない農作業をするつらい日が毎日毎日続いた。

大山小学校の校長先生と教頭先生が度々、小学校の教師に復職するよう勧めに来てくれたが舅が許さなかった。

五 農村工業始まる

昭和二十三年、長女が生まれた頃、主人の兄が私たちのために農村工業農業協同組合を設立して、穀物加工の事業を始めさせてくれた。経験したことのない仕事ばかりなので大変苦労したが、両親はよく面倒を見てくれた。また、地域の方々の支えによって工場は一日と繁盛した。

当時は食糧が不足していたので、農家は自家用として米、麦、大豆、小豆、小麦、菜種、そばなどを作っていた。それらはほとんど加工が必要であったので、私たちの工場の仕事は増える一方であった。特に小麦

の製粉は、昼夜連続で作業が行われるほどであった。子供たちはモーターとベルトの音を聞きながら眠り、私たちも同じようにその音を聞きながら休んだ。音がしないとかえって寂しさを感じるほどその音になじんだ。

それらの作業用のモーターは電力統制があつて、最初は限度いっぱい三馬力だった。その後、世の中が落ちていて電力も豊富になるに従つて、五馬力、次に十馬力とだんだん大馬力のモーターが許可され、政府の玄米、配給米の精米や大麦加工、菜種の油搾りもやらせてもらうようになり、乾麵製造機を入れて乾麵やそばの委託加工を始めるようになった。作業が増えるに従つて私たちの工場は地域の若い人たちの働き場所になった。

そのころ、農地解放によって小作農が自作農家になったので農村は活気にあふれた。また、生産物を加工して農家の収入を豊かにする態勢が整いつつあった。また大玉村には開拓団が入って荒地地や山林を開墾するようになった。私の実家もそこにたくさんの山

林地があり、開墾された。開墾された土地に文化住宅が建つようになり、勤め人が住むようになったが、私たちが引き揚げた当時は昔ながらの農家で、立花さんはじめ引き揚げた人たちが囲炉裏を囲んで満州での思い出を話し合ったものであった。

昭和二十六年に次女が生まれ、家族五人の生活が一段とにぎやかになった。厳しい労働は続いたが、家業は順調に伸びていった。オート三輪を買って、得意先へ原材料を集めに回り、製粉加工したものを配達するサービスを始めた。

工場に次いで住宅も建てた。五人家族に十分な広さにしたかったが、統制があつて十五坪が精いっぱいだった。狭いながらもとても楽しい毎日を過ごせるようになった。私たちには満足だった。その頃、世間の復興もようやく軌道に乗り、天然記念物に指定された「馬場桜」が満開の時季には虚空蔵様の祭りも一緒に盛大に行われた。朝鮮戦争が起こつて景気はさらに良くなった。

村の西北端に安達太良山がそびえている。戦後その

麓を開拓して、農地にするために何百戸も入植した。もともと寒冷地で、しかも高地なので、作物が育つか、生計が立てられるのかと案じられたが、入植した人々は私たちと同じく満州からの引揚者や復員軍人が多く、成功させなければという必死の覚悟と努力をされ、県当局も新しく研究開発された技法を導入して援助するなどして奇跡的な成果を挙げ、時間はかかったが、入植者の生活は安定していった。

入植した方々が私たちの工場に集まって、お互い引き揚げの苦労話をし、慰め励まし合うようになった。入植者の生活は安定したとはいふものの、立地条件も悪く苦勞の度合いはひどかった。それに比べて私たち一家は恵まれていたので、開拓者の立場に同情し激励もして、できるだけだけの応援と協力を惜しまなかった。また、開拓者の仲間もして親交の輪を広げ、前からの農家と開拓者とは一体のつきあひをするようになった。

その頃、私が小学校の教師をしていた時の教え子、押山時子さんと根本幸夫君、佐藤美智子さんと菊田幸

吉君の仲人をさせてもらったが、どちらも立派な家庭を築いている。こうして周りの人々との親交を深め、楽しい連帯社会の輪を広げていった。

六 主人天空をゆく

昭和三十三年五月、主人が機械事故で即死した。数えて四十歳だった。長男は東京板橋第五中学の一年生、長女は玉井小学校の五年生、次女は二年生だった。一家は幸福の絶頂から絶望のどん底に落ち、目の前が真っ暗になり悲嘆に暮れるばかりだった。そんな苦境を職人の方々が助けて下さった。工場の運営に誠心誠意尽力して下さって、もう十年になる。感謝の気持ちでいっぱいである。村や地域の方々の温情も身にしみた。その十年間私には、機械が動いているのは亡き夫が働いているように、モーターと機械の音は夫の働く音のように聞こえた。まるで夫と一緒に働いているような気がして必死に働いた。

製粉の仕事は市や町に大規模な工場ができ始め、製品も有名なメーカーから良質なものが販売されるようになったので、私は工場の運営をやめることにした。

主人が東京に貸家を建てていたので、長男はそこに住んで中学校から高校へ進み、大学を卒業した。私は東京練馬に土地を買っていたが、処分して本宮にアパートを建てた。このために借金もしたが、長女と次女を福島の大学に入学させ、卒業させられたのも、このアパートがあったお陰である。

七 社会教育の場に夢

私は、折りがあれば社会教育に携わりたいと思っていた。玉井婦人会の会員になって役員の当番が回ってきた時の総会で婦人会長に推薦され、それから勉強が始まった。

文部省の婦人教育指導者研修会が開かれ、県下で百人を募集してボランティアの研修会が行われた。

第一回開催は昭和四十七年で、私は村の教育委員会から、婦人教育指導者研修会へ出席するよう指名された。研修会は県下の役職者が対象で、会場は磐梯山の南麓、広大な猪苗代湖を一望する国立磐梯青年の家であった。講師の先生方の講義はとても面白く、なるほど、と驚くことばかりであった。また、県の研修会担

当者は、女子師範学生当時に同室だった小林八千代先生であった。先生は婦人教育の主幹で、すばらしい発想の持ち主である。私はよく面倒を見ていただいた。

婦人会長は農協婦人部の部長を兼務していたが、部長の仕事は二期務めて後継者に譲ることにした。婦人会の団体としての活動も面白いが、他に村当局のお手伝いをする仕事もあって、私は精神的な面についても教育委員会の指導もあって、私は精神的な面についても教育を受けた。太陽のくにの施設に宿泊して研修したり、老人ホームの慰問も実施して、世の中の人々の生き方を知り勉強になった。

その頃、長男に嫁取りの話があり、すぐにまとまって、大玉村小姓内の内野平章氏の次女、由喜子さんと結婚した。次の年、長女けい子が秋田出身の医師、小玉直志さんと結婚し、翌年、長男の敏に長女「紋子」が誕生した。私の初孫である。さらに、昭和五十年には次女、弘子が結婚した。短い間に子供たちは次々と巣立っていき、それぞれ自分の人生を歩き始めた。親としての私の役目は終了した。

社会教育の場を広げようとボランティアクラブを作り、どう運営するかを役員と模索していたが、当時住民課に勤務しておられた鈴木さんから「日赤奉仕団を結成したらどうか」と指導を受けて、昭和五十二年に大玉村日赤奉仕団を結成し、私は委員長を九年務めた。やりがいのある事業で、団員一同お互いに楽しい仕事であった。

また、玉井の駐在所の方や役場の職員、遠藤さん達の協力により、玉井交通安全母の会を結成した。家庭で交通事故について話し合うことが事故防止の第一歩と呼びかけて、全戸加入を目標に促進運動をした。また二年後に、幼児安全クラブを作った。ぬいぐるみの劇を見せたりして、楽しく遊ばせながら交通安全の意識を高めさせたりもした。

婦人会長は婦人消防隊も兼務していたが、婦人消防隊は独立するよう総会で決定し、兼務は解消された。

このように、いくつかの団体を結成したり、組織作りをさせてもらったが、これも婦人指導者研修会で社会教育の場に参加させていたおかげであると感

謝している。

私の住んでいるところに、天然記念物に指定された馬場桜という古木があるが、千年過ぎて春になると立派に花を咲かせている。源義家が、後三年の役の時にこの地を通り、馬場での乗馬にむちとして使った桜の枝を挿したのが根付いたものと伝えられている。

その近くに虚空蔵様があり、氏子みんなの心の拠り所になっている。四月十四日が虚空蔵様のお祭りで見光協会の宣伝もあって、祭りと馬場桜を見に東京、横浜など各地から大型バスを連ねてやってくるので大にぎわいである。私たちはボランティアとして、馬場桜周辺の草むしりや掃除を三十年も続けている。

私が婦人会長の時、花柳寿美先生のご指導を受け花柳流踊りの会を作り、練習を続けていた。先生のお供をして、平成十一年六月十二日から十七日まで花柳流あやめ会ハワイ公演に参加し、私たちは日本舞踊を三曲踊った。花柳寿美先生は歌手の北川裕二さんが歌うのに合わせて踊られ、大喝さいを受けられた。公演の後、私たちは街道約二キロメートルにわたって「会津

磐梯山」を踊りながら行進した。街道では現地の人が踊りを見てくれ、私たちは手を振って応えるなど感謝の意を表した。観客の中には日本人が大勢おられたので、親しみと感激はひとしおであった。

あやめ会ハワイ公演が行われたハワイシアターでは、各国の珍しい芸を参観したり、いろいろな変わった料理を好きなように頂くなど、今までに味わったことのない楽しい催しだった。日本とは全く違う様々な景色を見たり、人間関係を体験させていただし、心の底から感謝でいっぱいだった。

現在私は、母子寡婦福祉連合会の会長を引き受けている。平成十一年に、財団法人全国母子寡婦指導者研修大会が香川県高松市で行われ参加することになった。満州でお世話になった住田三郎さんが香川県で健在と伺い、是非お会いしたいと思っていた。前もって住田さんに連絡しておいたので、もう九十歳になられ足が達者でないというのに、わざわざ会場の香川県民ホールに訪ねて来て下さった。その住田さんに満州でお会いしたのは五十三年前で、奥さんには二度お会

いしただけだが、当時のことが思い出され懐かしく感
激した。住田さんは、満州での出来事はまたとない貴
重な体験だから、子供達によく話して知らせておくよ
うに繰り返し言われた。

五十数年ぶりに住田ご夫妻と再会できたのも、田崎
さんから住田さんのことを伺っていたからであった。
末娘の弘子が田崎さんの末の息子と結婚していたの
で、住田さんの情報が伝わったのである。

私は、息子の敏に「俺の生まれたところに連れて
いってくれ」と頼まれている。何とか丈夫なうちに、
敏と嫁の由喜子と一緒に奉天の芙蓉寮に行ってきた
と切に思うこの頃である。

社団法人引揚者団体全国連合会が記録募集している
ことを知ったのは、平成十一年九月頃であった。大玉
村改善センターで地域振興券の説明会が行われた時
に、立花開さんが元気で出席しておられたのを拝見し
て、昔のことが懐かしく思い出されて話しかけた。立
花さんは大玉村アットホームに行く道路端で植木屋を
兼ねて造園業をなさり多くの樹木を育てていたが、今

は仕事は息子さんにバトンタッチされ、立派な住宅を
建てられて悠々自適の生活であることなど、数十年ぶ
りに話し合った。後日、歯医者に来たからと立花さん
は私の家に立ち寄られた。その時、引揚者記録募集の
書類を見せられた。私は、満州引揚げの記録は家を新
築した時に片づけてしまったので、何も残っていない
からと話したが、体験したことをそのまま書けばよい
と言われた。住田さんにも繰り返し言われたこともあ
り、私の子供や孫たちに、満州に渡った頃のこと、引
き揚げの苦難の状況、引き揚げてから今日までのこと
を書き残しておきたい気持ちになった。

家族の中で一番満州の生活が長いのは、亡き主人で
ある。主人が元気だったら、その一切を捨てて命から
がら引き揚げてきた辛酸の生活を気負って書くだろう
としみじみ思った。現在私が健康に恵まれ、したいこ
とをさせてもらっているのは、亡き主人をはじめ、子
供や孫達のおかげであることに感謝とお礼の気持ちを
持って、書くことにした。

一言言っておきたいことがある。外国に住んでいて

戦争が始まったら、すぐ内地に引き揚げることだ。そして何よりも、戦争を起こさないことを祈るばかりだ。

色々な趣味を楽しみ、畑に野菜を作り、季節ごとに果物を作っては子供や友人たちに送り、喜ばれた。私は経済的にも安定し、精神的に充実した生活を過ごさせていただいていることに感謝している。過去の苦しみは現在の幸せのもとになっていると思ひ、心の財産が豊かになるように願ひながら日々を送っている。合掌しながら。

赤肌の赤峰はどうなっているだろうか

藩陽市の復興は今いかに

昔の影は今ほ思い出

幾多の人間模様を刻み

個人の復興が国の繁栄と

夢を追って生きている

共に語らい龍 立ち上がる

私の生活 心豊かに

避難乞食行^{こじき}

茨城県 岩間 重雄

一、おいたち

私は大正十五（一九二六）年十二月三日、父誠夫と母すゑの次男として生まれた。出生地は茨城県東茨城郡縁岡村である。私の上に兄一人と姉が五人、そして私の下に妹三人ができた。十人の兄弟姉妹である。當時は「産めよ殖やせよ」というのが国策であったので、父は厚生大臣表彰を受けることになり、全校児童が整列している前で村長から賞状が渡された。私は友達に冷やかされ、気恥ずかしい思いをした記憶がある。

大家族のため生活は苦しかった。姉五人は良くできて、それぞれ女子師範を卒業して教師になり、家業を助けたことは村でも話題になった。反面、男二人はあまり出来が良くなく、何かにつけて姉たちと比較され